



Kyo Cloisonné

京七宝の歩み

京七宝協同組合十五周年記念誌

目 次

- 02 京都府知事祝辞
- 03 京都市長祝辞
- 04 京都伝統工芸協議会会長祝辞
- 05 理事長挨拶
- 06 中原哲泉一知られざる近代七宝の名工 京都文化博物館学芸課 畑智子
- 10 中原哲泉七宝文様集の紹介 野村ひろみ
- 11 祖父・哲泉が残した下絵 中原顯二
- 14 美しき七宝 京都国立博物館工芸室 末兼俊彦
- 16 組合員挨拶
- 32 組合の歩み
- 35 歴代役員に関する事項
- 36 昭和の京七宝協同組合について 野村章
- 37 京七宝協同組合関係図

京七宝協同組合設立15周年に寄せて

ごあいさつ

京都府知事 西脇 隆俊



京都市長 門川 大作

京七宝協同組合が、設立15周年という記念すべき節目の年を迎えられ、ここに記念誌を発刊されましたことを心からお慶び申し上げます。

貴組合におかれましては、平成19年に設立されて以来、平成21年に「京七宝」を地域団体商標として登録され、平成25年には「京もの指定工芸品」の指定を受けられるなど、京七宝の普及活動や技術の保存・継承に積極的に取り組まれてこられました。

京七宝は釉薬の乗せ具合や焼き付けの温度で完成の色合いが変化するため、繊細で卓越した技術が必要となります。こうした技術が継承されながら、技術の改良と現代のニーズに合うような意匠の工夫を経て今なお発展されているのは、伝統的な技術を日々研鑽されるとともに、若手への御指導により技術やものづくりの感性を次の世代に引き継がれてこられた理事長をはじめ組合員の皆様の功績によるものであり、深く敬意を表する次第です。

伝統産業は、長期的な売上減少や生産量低下に加えて、新型コロナウイルス感染拡大という未曾有の危機に面しており、厳しい状況が続いております。

京都府といたしましても、京都の伝統産業を技術の継承や後継者育成の支援だけでなく、変化する生活様式に対応し、社会に新たな価値を付加する「生活文化提案型産業」として存在感のある産業へ変革・再生できるよう、全力を挙げて進めてまいる所存であります。

今後とも皆様と共に伝統産業の振興に向けて全力で取り組んでまいりますので、一層の御支援、御協力をいただきますよう、よろしくお願ひいたします。

結びに当たり、京七宝協同組合がさらなる大きな節目に向かって、ますます御発展されますようお祈り申し上げますとともに、組合員の皆様の御健勝と御多幸、さらなる御活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

職人の皆様が高い技術を駆使し、思いをこめて一つ一つ作り上げる京七宝。多くの人々を魅了するこの伝統産業の技と心を、室町時代から脈々と受け継いでこられたのが京七宝協同組合の皆様です。平成19年の設立以来、皆様は、地域団体登録商標の取得、京都市伝統産業への追加、共同購買事業による作り手の支援など、京七宝の継承・発展のために取り組んでこられました。さらに、ブランド力の強化や新たな販路の開拓を進めておられます。その貴い歩みが、この度、15周年の節目を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。野村ひろみ理事長をはじめとする歴代役員、並びに会員の皆様に、改めて深く敬意を表します。

近年においても皆様は、共同販売事業等を通じて、あらゆる機会を通じて京七宝の魅力を発信してこられました。そんな折、コロナ禍が発生。発信の機会が少なくなる中でも、令和3年12月に京都伝統産業ミュージアムで開催された「京七

宝マルシェ」では、優れた技術と洗練された感性による格調高い作品を展示。可愛らしい動物をモチーフにしたブローチや、京七宝ならではの輝きを放つ美麗なネックレスなども出品され、京七宝の魅力を余すところなく披露されました。

これからも、先人達が築いてこられた伝統の上に新たな歴史を刻まれるとともに、この度の節目を契機に、貴組合がますます発展されますことを願っております。

本市といたしましても、皆様の力強い歩みに力をいただきながら、コロナ禍はじめあらゆる困難を乗り越え、魅力あふれる京都を共々に未来へつないでまいります。さらに、京都に全面的に移転する文化庁とも手を携え、京都の伝統産業・伝統文化の継承・発展に、力を尽くしてまいる決意です。引き続き、御支援と御協力をお願い申し上げます。

結びに、創立15周年を経て、京七宝への想いと情熱を新たにされた組合員の皆様が、今後一層活躍されますことを、心から祈念いたします。

京七宝協同組合設立15周年記念誌発刊にあたって

京都伝統工芸協議会
会長 田中 雅一



このたび、京七宝協同組合が輝かしい設立15周年を迎えるにあたり、ここに記念誌が発刊されましたことを心からお祝い申し上げます。

貴組合は、平成19年に京都府から設立の認可を受けて以来、地域団体商標の登録、京もの指定工芸品の認定、京都市伝統産業の指定を受けられる等、京七宝のブランド力の確立と強化のために、数多くの実績を残されてこられました。

これもひとえに、野村ひろみ理事長をはじめ、役員、組合員の皆様方のたゆまぬご努力の賜物と深く敬意を表します。

設立以来、新商品開発や研修会を精力的に開催されていることに加え、組合員が年々増加されており、令和3年には他業界の模範となる団体として京都府から評価を受け、中小企業優良組合表彰を受賞されました。

また、昨年は、公益財団法人東京2020オリンピック・パラリンピック委員会が公募した「東京2020大会記念品プロジェクト」に、京都府内で唯一参画され、記念品を寄付されました。

このように、京都の伝統工芸品の素晴らしさを広く世界に発信されたことに対し、伝統工芸に携わる同志として大変誇らしく思います。

ご承知の通り、著しく変化する社会情勢の中で、伝統工芸業界は後継者不足に加え、少子高齢化に伴う人口減少と消費の減退、生活スタイルの変化といった様々な課題に直面しており、危機的な状態が続いておりますが、貴組合におかれましては、伝統工芸業界を牽引する団体として引き続き一層の充実を図られ、暮らしに彩りを添える創造性豊かな京七宝をさらに普及していくことに大いに期待するところであります。

本協議会といたしましても、貴組合の皆様と連携を図りながら、伝統産業の振興に力を尽くして参ります。

結びにあたり、京七宝協同組合設立15周年を契機として、貴組合の今後ますますのご発展と、役員、組合員及び関係者の皆様方の一層のご繁栄とご多幸を心より祈念し、私のお祝いの言葉といたします。

組合設立15周年を迎えて

京七宝協同組合
理事長 野村 ひろみ



喜ばしいことにこの度京七宝協同組合は設立15周年を迎えました。発足当時を思うと、京七宝の名前を他の地域が使う等、存在が危うくなるような状態でした。当時のづくりにとって稀有な会であった協同組合京都クラフトセンターの会合で有限会社美装の遠藤泰一社長とお会いし危惧を話し合った所、社長は藤岡伸次郎氏に交代するので彼と今後を頼むとのことで、以後藤岡氏とともに組合結成の歩みをしました。組合成立のために京都府伝統工芸課の方々、金属工芸協同組合の方々、京都市伝統工芸課の方々、設立発起人の方々などなど、皆様方のご支援とご協力を頂いた御蔭で念願の京七宝協同組合を、立ち上げる事が出来ました。その間藤岡氏は純真に京七宝の事を考え、惜しまず組合運営に努力をして下さいました。創立当初は事務局も全てにおいて不慣れで、中央会歴代京七宝担当者の方には、手取り足取り教えて頂きました。先般優良組合に表彰頂けたのも全て中央会の指導あってのものと感謝に耐えません。また、京都府の「京もの指定工芸品」に指定されたことが新聞に報道された時、元稻葉七宝株式会社の会長の稻葉勝己氏がおい

でになり「ひろみさん、よくやって下さった。本当に嬉しい。七宝が京都から消えるのが残念で・・・自分に出来ることがあれば、協力するから。」とそれから15cm位の高さの、真鍮線の細かい模様が付いた壺をお持ちになり「うちではもう色が付けられないからあんた付けてみて・・・。」と一つくださいました。頂きながら会長から何か託された思いがし、身の引き締まる気がしました。「小さかった頃、大きな穴に、滑車で大きな壺を吊って焼いていた。」などの話も伺った。会長の並々ならぬ京七宝に対する熱い思いを感じました。

京七宝は多分、室町時代から令和の今日まで七宝に魅せられた人びとの想いや、つくり手の絡まり、時代の要求のなかに今まで続いてきたと思います。日本での七宝の初見である、古墳時代の齊明天皇の世から糸余曲折があったことでしょう。いま私たちは七宝を業としています。厳しい時代です。時代に沿ってしたたかに生きて七宝の素晴らしさを次に伝えたいと願います。これまでお世話をなったすべての皆様に感謝すると共に引き続きご支援ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

中原哲泉

— 知られざる近代七宝の名工 —

畠 智子

明治を代表する七宝の製作として並河靖之は世界的に有名ですが、その影にこの並河工房で制作に携わった名工が存在しました。中原哲泉。並河工房において工場長も務め、その制作における中心的役割を果たした人物です。

中原哲泉は文久3年（1863）12月17日に父・中原興利（要人1808-87）と母・多川（-1875）の次男として京都御所苑内、内櫻木町に誕生。祖父・中原右京は藤原氏水無



中原哲泉（『京七宝文様集』より転載、所蔵者の承諾済）

瀬家庶流の堂上家である町尻家の当主・従二位中納言町尻（藤原）量輔卿に仕えており、兵庫寮（朝廷における武器の管理・出納の任務）に属していました。安政2年（1855）に祖父が亡くなった後は父が跡を継ぎ、同様に町尻家の家司（雑掌）を務めます。

東京遷都と天皇の東幸によって多くの公家を含む皇室関係の人々は京都を去りました。町尻家も天皇とともに東京へ移転し、明治7年には仕えていた藤原量輔卿が亡くなったため中原家は町尻家司を退くことになります。中原家はこれより前の元治元年（1864）7月19日の禁門の変と共に伴ういわゆるどんどん焼けによって御所御苑内を焼け出され、上京区の住居を経たのち、栗田口村拾八番戸の借家に移ります。

混乱の中で維新を迎えた中原哲泉こと哲之輔は、どのようにして七宝技術を学んだのでしょうか。国家的に殖産興業政策が勧められる中、京都府では理化学教育とその応用によって殖産興業をはかるべく、明治3年（1870）に河原町二条下ル勧業場内に舎密局が設置されました。その後新たに夷川土手町に本局を新築し、陶磁器・七宝・硝子・漂白粉・石版術・写真術等の実験場や製造場を増設して規模を拡大、ここで多くの受講生が学んでいます。

大正期に書かれた哲泉の履歴書の写しには、「勧業官之壱部ニホウロク官トゴウス七寶焼ヲ専門ニ製ス局」があり明治11年9月3日、14歳のときにこの門に入った、とあります。哲泉は約



中原哲泉による藤花文様花瓶下図（『京七宝文様集』より転載、所蔵者の承諾済）

1年間ここで七宝を学んだようです。明治11年3月にはアーレンス商会の紹介でドイツ人化学者、ゴッドフリー・ワグネルが京都府勧業場に招聘され、陶磁器、七宝・硝子・石鹼などの化学分野の進展に大きく寄与しており、まさにこの時期に哲泉はワグネルからも学んだ可能性があります。哲泉の履歴書には、明治12年10月10日に並河家の七宝制作に従事した、とあります。

明治初期、並河靖之は新たな産業としての七宝に着目し、その技術習得に苦労して取り組んで

いました。『名家歴訪録 上篇』には明治6年に初めて七宝鳳凰文食籠を制作したとあります。その後明治8年には第4回京都博覧会に出品。明治10年の第一回内国勧業博覧会にも「七宝舞楽図花瓶」を出品し、すぐれた作品として鳳紋賞牌を得ました。現在宮内庁が所蔵する「七宝舞楽図花瓶」の図案が、中原家に存在することが近年判明しました。このことから哲泉は明治10年以前から並河家と知己があったのではないかと考えられます。

七宝制作に従事した当初、哲泉は下図を描くことを専門としており、中原家に残るおびただしい数の下図はその精巧な仕事を裏付けています。『中原哲泉 京七宝文様集』淡交社刊、1981)しかしその後哲泉は、図案職人にとどまらず、七宝のすべての工程にかかわってきたことがわかつきました。明治18年の哲泉の住まいの平面図が残されています。白川沿いに面した「白川筋西筋石泉院町392番地」の住まいは、並河家とは白川を挟んだ西側に位置しています。この約70坪の屋敷の平面図によると、土間には「七宝窯場」、座敷の部分には「七宝工場」、白川側には階段下に「洗場」と書かれています。ここは図案だけでなく植線、釉薬の充填、窯焼、研磨まで作業できる大きな工房です。この広さは並河家の工房跡と比べても、かなり大きいことがわかります。

明治4年、国内において最初の京都博覧会が始まりますが、その後国内外の多数の博覧会において並河工房は多くのすばらしい七宝を出品して数々の賞を得ます。明治33年パリ万国博覧会に出品した黒釉四季花鳥図花瓶（宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）において哲泉は「製薬法モ改良シ靖之氏ノ助シト成リ」制作した、と記しています。明治36年の第五回内国勧業博覧会の出品に際しても「絵具薬並ニ焼成法ヲ改良シテ靖之氏ノ代理人ト成リ焼成スル事ヲ勤ム」とあり、自宅の工房を得てからは、図案を描くだけの職人にとどまらず、工程全体を把握し、釉薬の改良や焼成法にも深くかかわってきたことがわかります。

しかし残念ながら多くの作品を生み出したこの工房も、大正14年には立ち退きを余儀なくされてしまします。哲泉は工房を閉め、北区紫野へ移転して昭和17年12月1日にその生涯を終えます。

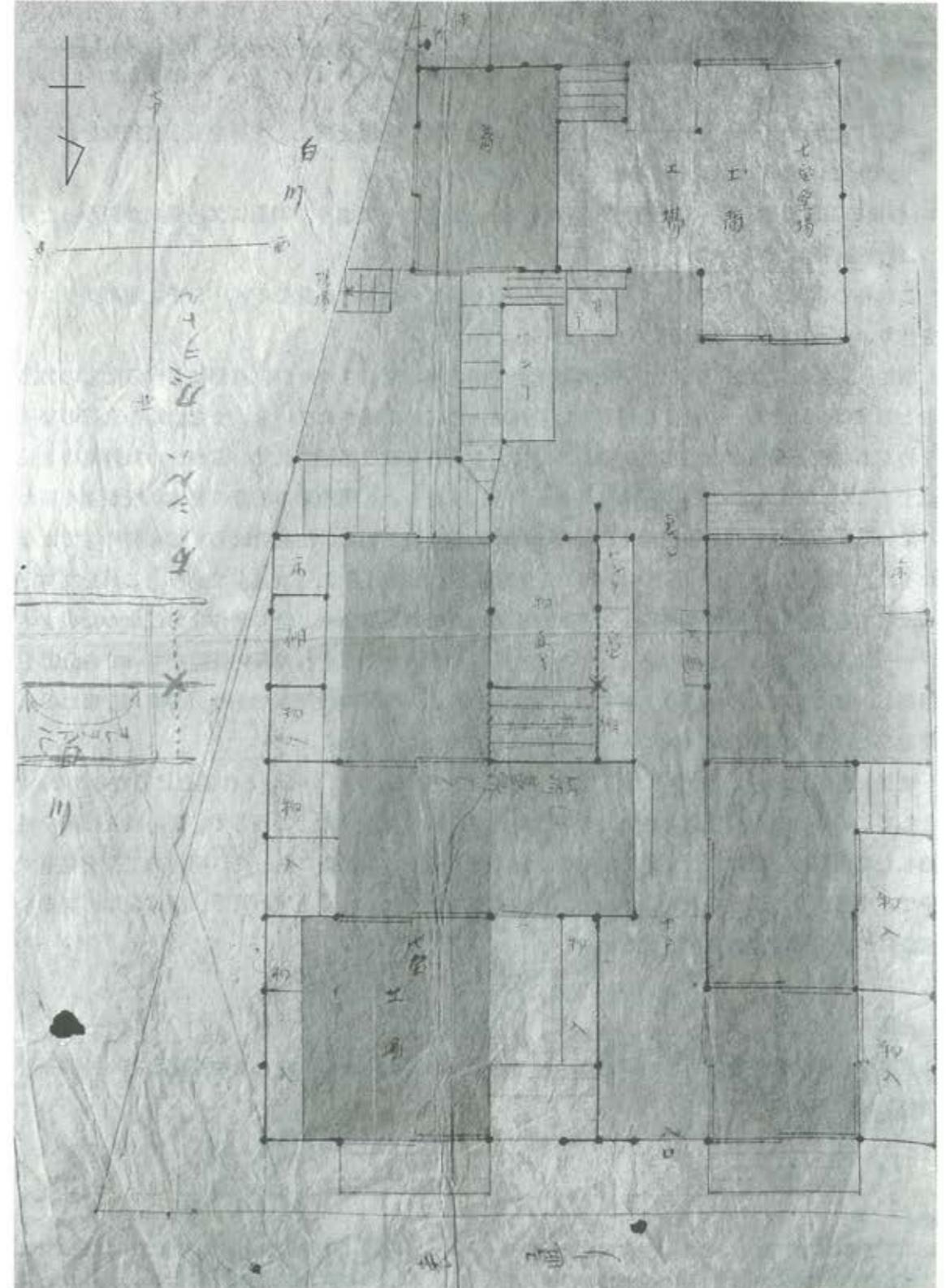
大量に残された哲泉の図案を熟覧していくと鳳

凰や龍、蝶などの文様が多いことに気づきます。名古屋の七宝とは異なり、京都の公家文化に培われた高雅な感性が確かに感じられます。さらに下図の美しく繊細な線を生かすための植線の高い技術、微妙な釉薬の配合と色の選定、研磨の仕上げなど、それぞれの分野に精通した職人がおり、さらにそれらの技を統合する人物がいたからこそできた完成度の高い仕事です。個々の技術に習熟した職人でもあり、それらの仕事を見事に統合する力のあった中原哲泉の存在が、並河靖之ブランドを支えたといえるでしょう。

(京都文化博物館学芸課 畑 智子)



中原哲泉による鳳凰菊文花瓶下図
（『京七宝文様集』より転載、所蔵者の承諾済）



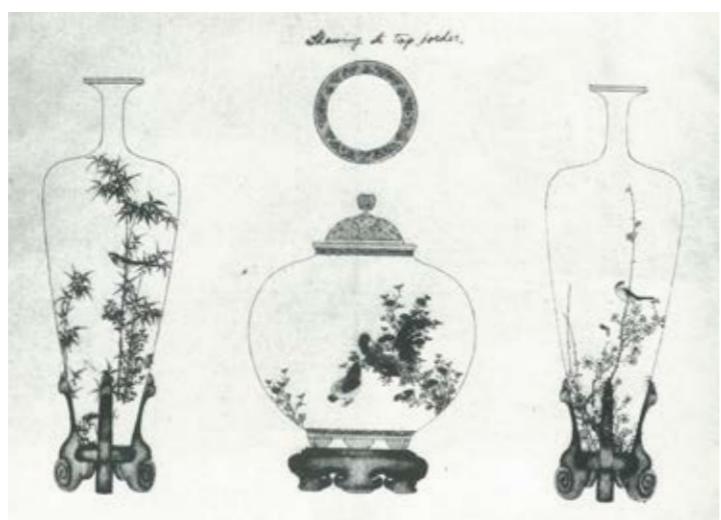
中原哲泉の自宅兼工房の平面図（個人蔵）——京都文化博物館研究紀要 朱雀 第24集（発行・京都府京都文化博物館）より転載

吉田光邦 中原顯二著
「中原哲泉京七宝文様集」の紹介

野村 ひろみ

中原顯二氏のご厚意で令和3年12月17日に初めてお目にかかることになり、ご自宅に伺いました。奥嵯峨苑という名前にふさわしい、いかにも京都ならではの風情で、お座敷に入ると素晴らしい石組みの庭が広がっていました。中原哲泉のお孫さんである顯二氏はおじい様である哲泉の、筆で描いてあるとは思えないような、細くしかも力強い線で描かれた多数の下絵を見て下さいました。それらはどれも有線七宝にそのまま使える下絵です。並河靖之の舞楽図花瓶や四季花鳥図花瓶の下絵もありました。中原家は御所の中に住いのある家柄で、御所の部屋の間取りや行事の行列などを記録する職でもあったのか、そうした図が花鳥のほか多数残されています。

吉田光邦と中原顯二著の「中原哲泉京七宝文様



花鳥文 花瓶 二種各 7 種 鶏文 壺 12.2 種

祖父・哲泉が残した下絵

中原 顯二

集」には中原哲泉の描いた文様が掲載されています。顯二氏はその文様が広く周知されることを望み、その本の中に紹介されている図柄は、京七宝の中でどのように使用しても構わないと発言を頂きました。すでに我々の仲間に自らの七宝の上に取り入れ、使われている人もありますが、これらの京都らしい雅な図柄を京七宝に表し、並河靖之の作品と共に先人の残された宝を守って行きたいと考えます。七宝の技術を後世に伝えることは至難の業ですが、これだけの下絵が残され、出版されていることは、京七宝を継承する者にとって極めて大きな財産であります。この本の中の顯二氏の文章を転載させて頂き、この本を皆様にご紹介致します。

「中原図案」を継いだ父から譲り受けた祖父の七宝の下絵集が今回出版される事になり、大変うれしく思うしだいです。当時の七宝焼については知識がないのでくわしく書けませんが、明治の『名家歴訪録』の文中で並河靖之氏が語るところに、

共精緻麗妍にして、花鳥虫豸の一々真に逼れる、實に老畫家をして激賞せしむるに足る。而して一回も師に就きたるなく、悉く自得の畫圖なりと云ふに至りては、豈また希有の天才ならずや。

としるされています。明治初期から昭和初期まで、有線七宝の精密に書き上げた下絵を元に、製作までしたと聞いています。この下絵の多くを見れば正倉院御物等から取り入れた物が多く——龍・蝶・

鳳凰・花鳥・唐草等——それらを獨得の図柄で七宝の文様にしたようです。当時この下絵を使用した数々の作品は、内外博覧会等で高く評価されていました。また宮内省の御用品の製作にも従事していたと聞いています。

染織の仕事をしている私にとって、この下絵の数々は、他のどんな参考品にも劣らぬ手本になっているのです。祖父が独自で一生打ちこみ書き上げた下絵を、少しでも多く染織に取り入れて現代に生かし続けていく事が、受け継いだ私の使命だと考えています。

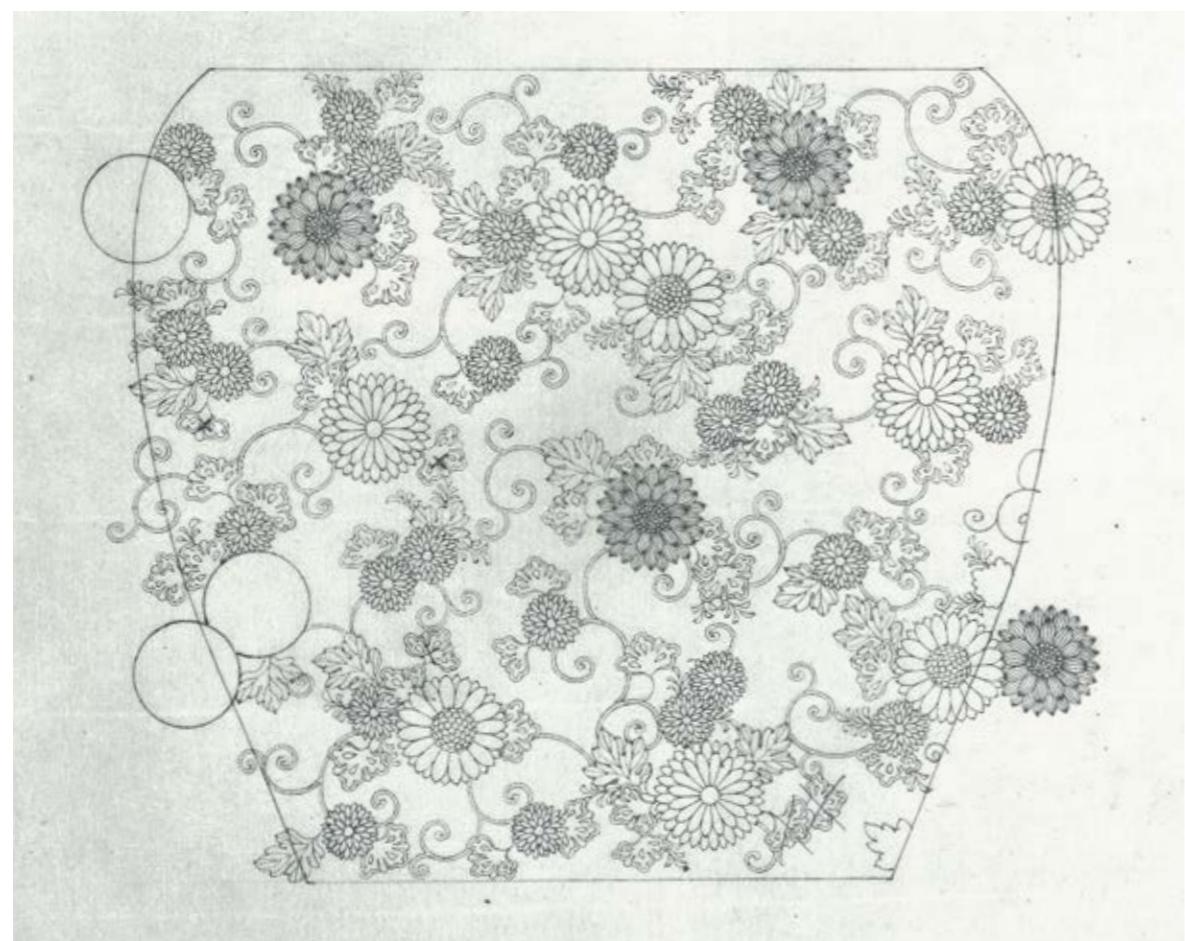
最後に、約一万点にもおよぶ図柄の中から、厳選して三百点余りをおさめましたこの本が、より多くの方の参考となるように願うしたいです。

中原哲泉略歴

文久三年（一八六三）十二月十七日、京都御所御苑内、内檜木町に中原興利の二男として生まれる。幼名哲之輔興忠。母は旧侯爵山井家より入嫁。名は多川。明治十年頃、旧青蓮院宮家従であった並河靖之（一八四五～一九二七）の七宝焼製造の事業に加わる。ここで七宝の各技術を研究練磨。以後、工人指導に当り、自らは七宝の下絵を描くことに専念する。この頃、森寛斎から、その才能を激賞された。その後、並河靖之は内外問夏会に出品し、多くの賞を受け、さらに明治二十九年には帝室技芸員となり、宮内省御用達として勲章の製作を行ったが、哲泉はこれらの図案を多く作成した。また明治天皇の御手許用品を製作することも多かった。大正年間には哲泉自身の名儀で、作品を提示することもあったよう、今日中原家には戦捷記念博覧会褒状（大正四年）、大典記念京都博覧会記念状（四年）、京都工芸品展覧会記念状（五年）、京都時覧会褒状（六年）、半日会賞状（十三年七、八月）等が、中原哲之助の名を以て伝えられている。なお、京都の造園界の第一人者であった小川治兵衛（植治の名で知られる）の依頼により、円山公園、平安神宮神苑をはじめ、山県有朋、野村徳七、住友吉左衛門など、今日名園といわれる各庭園の設計にも、すぐれた才をしめした。昭和十七年十二月一日、京都市北区紫野御所田町の自宅で死去。八十二歳。



花鳥文 5.3 檻



菊唐草文 壺 13.8 檻



鳳凰文 14.2 檻

美しき七宝

末兼 俊彦

様々な技法や素材を用いる金属工芸の中で、古くから新しい存在が七宝です。七宝とは、金属で作られた器の表面に、陶磁器の仕上げに用いられる釉薬と同様のものを塗り、高温で焼成してガラス質の被膜を作る技法とその技法によって作られた作品のことです。基礎となる素材に金属を用いる分、陶磁器より頑丈で薄く、繊細な造形を作りやすい点が七宝の特徴と言えるでしょう。「七宝」の名前は、釉薬の成分を変えることで様々な発色を示すさまを『無量寿経』や『法華経』に語られる仏の国を飾る七つの宝（金、銀、瑠璃、玻璃、硯磲、珊瑚、瑪瑙ないし金、銀、瑪瑙、瑠璃、硯磲、真珠、玫瑰）に見立てつけられたとされています。その名のとおり、七宝は多種多様な色の組み合わせで彩られる色彩豊かな工芸品なのです。

古代の七宝

日本における七宝そのものの発生は比較的早く、現存する作例としては飛鳥時代の奉牛子塚古墳より出土した「七宝龜甲形座金具」や、奈良時代の正倉院宝物「黄金瑠璃鉢背十二稜鏡」を挙げることができます。また、厳密な意味での七宝ではありませんが、藤ノ木古墳から出土した「金銅装鞍金具・後輪」の取手には、熱せられてまだ柔らかい状態のガラスを粘土のようにこねて押付けた装飾が施されています。釉薬と近しい成分であるガラス製品も古代から生産されているため、当時の人々にとっても比較的なじみ深いものだっ

たのかもしれませんね。しかしながら、それ以降、直接的な継続関係にある作品はほとんど生まれず、日本における七宝の製作はここで一旦途絶えてしまったと考えられています。

近世の七宝

日本製の七宝が再度出現するのは室町時代末から桃山時代初頭にかけてです。それまでの間、日本国内での製作こそ行われてはいませんが、七宝そのものが日本社会で忘れ去られていたわけではありません。特に室町時代においては中国文化や中国からの舶載品を珍重した足利将軍家の意向もあって、中国製の水墨画や陶磁器と共に七宝の存在も伝えられていたと思われます。桃山時代を過ぎると、中国大陆や朝鮮半島から再度もたらされた七宝技法をもとに、日本国内での七宝製作が盛んになり、その流れは明治に至るまで続きました。

図1の「七宝唐花文手付盆」は、アーチ状の取手と花先形の脚をもうけた銅製の盆に有線七宝を施した作品で、この種の七宝作品の中では最も早い時期に製作されたとみなされています。有線七宝とは、単純に釉薬を器胎の表面に塗るだけではなく、細い金属線で境界を作り、成分の異なる釉薬が混ざらないように配慮して、色の住み分けを行ったものです。七宝は陶磁器との影響関係が多く、この有線七宝の技法も中国の粉彩磁器の一つ招緜琺瑯を意識して開発されたものと思

われます。地に有線七宝による繊細な唐草を巡らせ（図2）、その合間に円形の空間を設けて図様を表す構成は、粉彩磁器の中でも多数の色を使用し、塗り埋め方式で装飾する十錦手との関係を指摘されることも多く、これこそ金工の職人と陶磁器の職人がお互いに分野を超えた刺激を与えていた証拠ではないでしょうか。

見込みを斜めに二分割する片身替の構成は、本来、室町時代から桃山時代に隆盛を見せたものですが、その斬新なデザインセンスは何度もリバイバルされ、江戸時代の小袖にも用いられるなど、復古的な意味合を持つ図様です。それに加え、変形の菊桐紋を各所に散らすなど、その意匠と図様構成に明らかな日本の感性が見られますが、最も大きく描かれた如意頭形八弁唐花文や捻十弁唐花文に中国的な要素の混入を認めることができます（図3）。江戸時代の七宝には、中世以前からの日本的な意匠や図様に七宝で補彩的な彩色を施したものと、器形や文様構成そのものを中国的なものの模倣とする二系統が存在しますが、この盆は日本的な感性のもと、中国由来の意匠を巧みに取り込んだ両者の折衷作品と言えるものなのです。金工的な要素と陶磁器的な要素、日本的な要素と中国的な要素、中世的な要素と近世的な要素、様々な影響をまとめ上げたところが見る人を惹きつける七宝の魅力なのです。

（京都国立博物館工芸室 末兼 俊彦）



図1 七宝唐花文手付盆 江戸時代 京都国立博物館蔵



図2 七宝唐花文手付盆 江戸時代 京都国立博物館蔵 部分

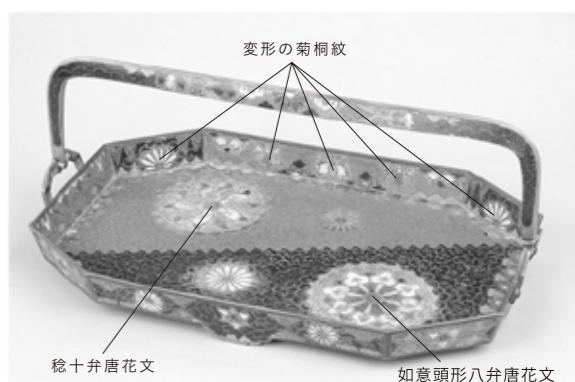


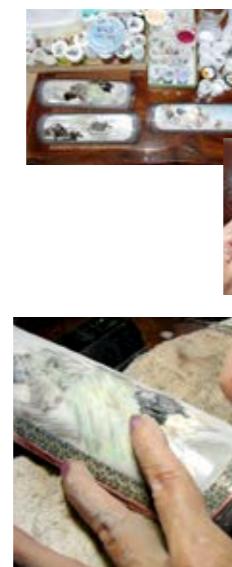
図3 文様の名称

七宝の歴史をたどる時、明治以前の七宝の記述が少なく、いろいろな説があり、とまどうことが多かった。この末兼先生の文章を読んで、近世の七宝について的確に書かれているため、お話を伺いたいとお電話したところ、「これが現在の学会においての七宝に対する共通の認識である。」とのことでした。京七宝協同組合として、この考え方を我々の共通認識としたいと思います。

若い頃から、私は“人間として自立して生きたい”と自然のこととして思っていた。学校を出て仕事を考えた時、好きな、色を使う仕事が出来たらと考えていた。ある時（現）細見美術館蔵の伝聚楽第夕顔紋釘隠しの写真を見た。金属とカラフルな色の造形、その高貴な美しさに感動した。これこそ自分の一生の仕事と思った。

数年後「銀」を主体とした自分のスタイルの七宝を考えた。当時の銅を主体の七宝界において斬新であったかと思う。また、アクセサリーをつくるのに「落としの枠」を無くして、所謂溶断、切断した金属の周りを溶かし一枚板で銀台を作り七宝をする手法を考えた。この手法は自由に形が作れ、切りっぱなしの金属より大変有益で、下引きの“ひき”がすくなく、端のひび割れがおこらない。今も当社の基本的製法である。この製法で作った作品が京都クラフトセンターの選定品となり、会員となった。ここからプロとしての七宝人生が始まった（1969年頃）。1989年4月嵐山工房

を開いた。毎日が七宝に明け暮れる日々であった。新しい技法、新しい材料、新しい器械に取り組んだ。そんなある日、木工芸の綾部さんから東芝初代田中久重氏制作万年時計の仕事の話があった。愛知万博に出展される万年時計の七宝部分の制作である。なぜうちに?ほかに引き受けところがない一のこと。見本の写真をみるとメインの柄は、シンプルでおおらか、周りのふち飾りは、根気があれば何とかなりそうと考えた。興味に惹かれつい「面白そうですね。」といい、私が作ることになった。綾部さんとともに名古屋の安藤七宝店に伺い社長にお会いした。社長から安藤七宝店百年史、「鏤采摘文」を頂いた。かくして2004年12月、現物と写真のみで、図面も何もない状態から2005年9月完成まで、万年時計に取り組んだ。このプロジェクトは私にとって、先人の技を知る機会で、ありがたかった。……すればするほど七宝は難しい。そして魅力的!これが50数年たった今の感慨です。



参考資料：万年時計復元・複製プロジェクト「江戸のモノづくり」研究班

京七宝協同組合が15周年を迎え、記念誌を発刊されますこと心からお祝い申し上げます。現理事長の野村ひろみさんが、「京都の七宝の伝統を守り後世に繋げていけるよう、皆さんと一緒に頑張って行きましょう。その為には組合が必ず必要で、組合員皆さんの為になるような京七宝協同組合を立ちあげましょう」と声をかけて下さり、組合員となって早くも15年。

この間組合を通じて多くの方との出会いがありました。先ずは同業の人と関わること。組合行事の研修会、展示会に参加することでいろいろな刺激を受けました。京都の伝統工芸品として「京七宝」が指定されたことで、京都の伝統工芸の方々にお話を聞かせて頂く機会や、京都府さん京都市さんの方々とも名刺交換させて頂く機会が増えて、沢山の情報をもらえるようになりましたが、大変ありがたく思っています。

時代の流れと共に七宝業界も弊社の方向性も変わってきたが、多くの人と繋がることは視野も世界も広がりますし、とても大事なことで大きな財産だと思っています。

最近インターネットでの販売を通じて、七宝焼き

に関心を持たれている方が増えているように感じます。

京七宝もブランドになってきているのではないかと思います。引き続き、国内でのPRも更に積極的に行い越境ECサイトも力を入れて海外への販売を成功させたいと思っています。

そして京七宝協同組合が20周年、30周年と益々発展しますよう願っています。

略歴

- 1984年 3月 奈良芸術短期大学卒業
- 1984年 4月 (株)山田七宝入社
: アクセサリーデザイン、彫金と彩色に携わる
- 1986年10月 (株)山田七宝退社
: 七宝焼のアクセサリーの製作販売で創業
- 1991年 5月 (有)七彩工房 設立
: この頃から額絵「染型七宝」が主体となる。
記念品の需要が多くメーカーとして卸売が主でした。
- 2007年 京七宝協同組合加入
: 催事へ出展しての直販に移行
- 2013年10月 「京七宝ギャラリー NANASAI」
七彩工房直販店 open
: インバウンド観光がどんどん増える時期。
- 2019年12月 コロナウィルスが出現



七宝焼時計「花唐草」



鶴川（額）

(有)贊工芸

Sankougei

私は山田七宝から七宝に携わり54年になります。初めは続ける気持ちがありませんでしたが、沢山の方々に支えられたお陰で今まで続けることができました。

組合が発足されたことにより、さらに多くの七宝をされる方々が増えることを望んでいます。七宝が全盛期の頃にこのような組合が存在していれば、横の繋がりができてよい作品作りができたはずです。世間は七宝焼というと軽くあしらうことが多く、象嵌と比べると百貨店からの扱いが良くないと感じます。今後は七宝に携わる方々の力になりたいと考えています。

代表 赤川 吉洋



私は組合の活動（主に組合展）に参加する中で感じることは、七宝には様々な色や表現方法があるということです。つくり手によって全く異なるものになる、というところが面白いと思います。同じ材料を用いても形になると、人それぞれ。夏の講習会でいつも思うことです。その違いから、また何か新たなものが生まれそうな気もしています。これから先、七宝をどのように展開していくべきか悩むところではありますが、続けられるかぎりは続けていきたいです。

栗栖 美樹

(有)山本美術

山本慶子

Yamamoto Keiko

35年以上。七宝に魅了され続けて一生の仕事となっております。

あと何年作れるかは分かりませんが、少しでも多くの方々に、七宝の世界を知って頂き、喜んで使って頂ける物を作り続けたいと思います。また、一人でも多く作られる方を増やしたいです。組合が出来てからは、より七宝の視野が広まり、お互いの苦労や成功を共有させて頂く事で、更なる高みを目指そうという意欲が湧いてきました。

仲良く、刺激し合いながら、これからも続けていきたいと思います。

(有)山本美術・七宝部では、有線七宝の企画製造卸の他、プレスパッチ他の量産品の製造加工もしております。

用途も和装小物からアクセサリー、時計、額、建築金物、家具、バッグ、ボタンなど、色々な部品にお使い頂いております。

特に有線七宝は単品オリジナルのご依頼にも対応しておりますので、お気軽にお声がけ下さいませ。



稻葉七宝株式会社への就職（1984～1987）がきっかけで七宝に出会い、数多くの七宝製品を取り扱い、販売する機会を頂きました。そして何より製造部は、「一生かかるても手の届かない世界」と絶望する程の熟練技の数々で、七宝の深さを知る衝撃的な日々となりました。結婚後、製造する事になり、職人さん方の背中から感じた事を思い出し、自分なりに作り続けて



クルミの箱「白花」

アミタエムシーエフ株式会社

AMITA MCF CORP.

アミタエムシーエフ株式会社は、1932年創業の外国人向け免税販売を行うアミタ株式会社から2005年に製造部門を分割したメタルアクセサリーを製造販売している会社です。



七宝製品の製造は1980年頃から行っておりましたが、一時期におきましては販売のみしており、その後、独立行政法人造幣局で製造されている勲章・褒章及び金属工芸品の加工を行うために生産ラインを2014年に内製化できるよう再編成し、2019年に京七宝協同組合に入会させて頂きました。

当社の特徴は、デザインから金型、プレス、ろう付け、研磨、めっき、仕上げ加工まで全てを社内で一貫生産出来る事です。

お客様と打ち合わせを行い、デザイナーがイメージ画等で提案し、そのデータを基に社内で金型を切削加工します。出来上がった金型で加圧力が400トンものプレス機で材料を圧写し、裏の部品付けや研磨、めっきなどの様々な加工を一つの建屋で行い、完成させお客様へお届けしております。

企業の社章を始めとし、校章・団体章・組合章などのピンバッジやクリップバッジの製造、国内外ライセンスブランドベルトのバックル企画・デザイン・製造、オーダーメイド表彰記念品、アニメやキャラクターのOEM・オリジナル商品の企画・製造販売を行っており、造幣局のメダルや勲章部

品等を中心とした金属工芸品の加工や製造も行っています。



七宝製品につきましては造幣局での研修や指導を受け、技術の底上げを行い、双眼顕微鏡を使用し、七宝内にある不純物やピンホールを見つけ、除去、修正するという今まで経験しなかった高いレベルでの品質を求められる製品作りに参画し、現在も継続的に仕上げ加工の業務を受注しております。

他にも、キッチンメーカー・車両メーカーのブランドエンブレムや、個人のお客様のオリジナルエンブレム、キャラクターブランドのバッジやアクセサリーの企画・デザイン・製造を行い、お客様の希望に合わせた製品作りや自社ブランドの新商品づくりを小ロットからでも対応しております。

2022年は京七宝協同組合の15周年の節目の年です。まず、これまで組合を発足から盛り立ててこられました方々に深く感謝いたします。そして、これから組合活動がさらに活発となるよう微力ながら努めて参ります。

未筆ながら、京七宝協同組合の一層のご発展と組合員の皆様のご活躍を祈念致します。



藤 富起

Fuji Fukui



七宝を楽しみはじめてから五十年程になります。作業をしてますと関連した分野の技法を知りたくなり、金工、木工、ガラスなどの指導を受けておりましたが、七宝に必要なことだけを個人的に学ぶということに限界を感じておりました。組合が結成され、いろんな分野の研修会を企画され続けてこられたことに、一組合員として感謝しております。七宝技法が新しくなっていくなかで、京七宝の特徴が埋もれていくような感じもします。これからも、和気あいあいとした雰囲気の中で、京七宝の良さが広められていくことを願っております。



ちょうちょう（ガラス箱）



緑蘿-midorinokage-（スタンド）

野間富美子

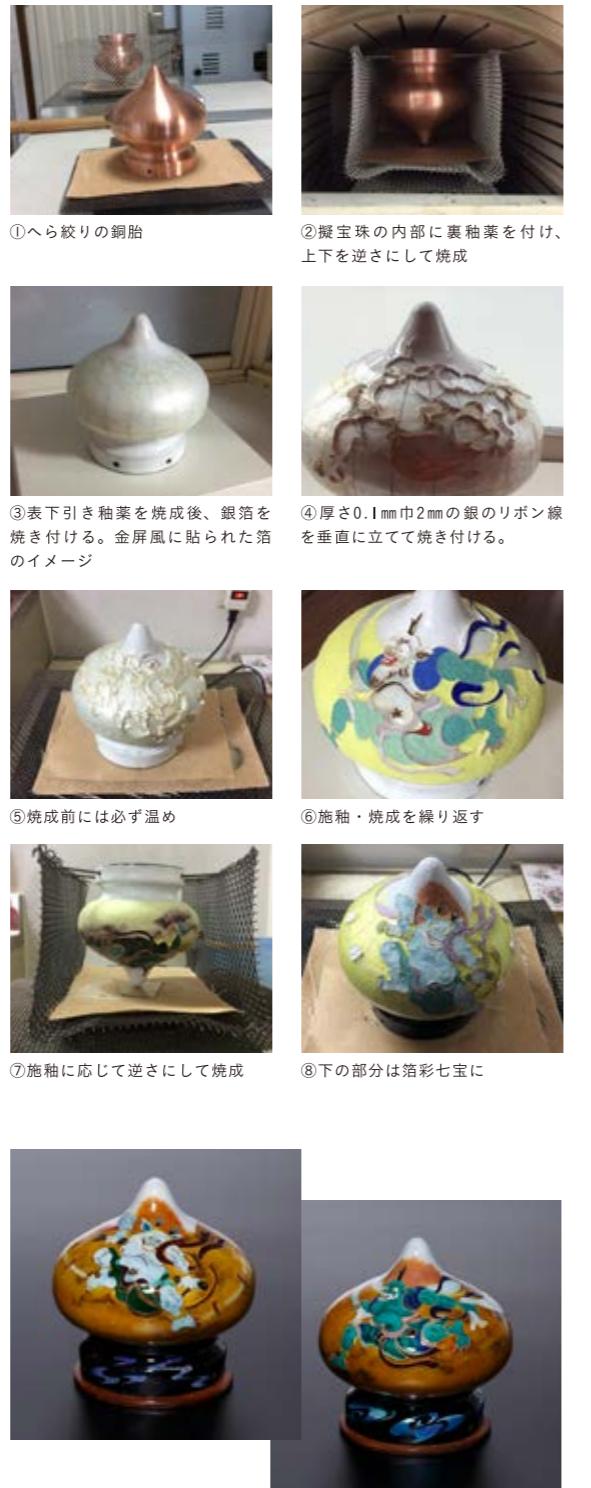
飾り擬宝珠の制作

京都の橋を渡るたび、いつか擬宝珠に七宝を施してみたいと思っていました。

七宝焼きとの出会いは30年以上前。たまたま旅先でお伺いしたお宅に飾られていた七宝焼きの額に魅せられ、帰って早速日本工芸会正会員でおられた馬越愛先生の七宝教室を尋ねて基礎的な技術を学びました。常に研究熱心な阪本順子先生から立体制作や省胎七宝など様々な技術のアドバイスをいただいたり、国際的にも活躍されている仲村英子先生からその自由で生き生きした表現を学んだりし、多くの失敗を繰り返しながらも、小さな工房で楽しくものづくりを続けました。その後、京都市金属工芸研究会で知り合った野村ひろみさんから伝統工芸継承への熱い思いをお聞きし、七宝組合に参加。2015年、組合事業の一つ「琳派400年記念事業」で飾り擬宝珠に取り組む機会を得ました。

立体作品に欠かせない金属胎をヘラ絞りで成型できる方は今は少なく…やっと見つけたのが高度な職人技と先端技術に取り組まれている(株)西垣金属工業でした。社長のご厚意により特別に製作していただき、遂に擬宝珠に七宝を施す準備が整いました。

今まで様々なご縁とお力添えによって七宝制作を続けることができました。本当にありがとうございました。けれども、制作にはまだまだ改善と工夫が必要です。これを見て七宝焼きに興味を持ち、一人でも多くの方が制作したいと思われることを願います。



銀張り有線七宝 飾り擬宝珠 「風神雷神」

作品は俵屋宗達の描いた風神雷神が金屏風から飛び出し、都大路に向かって賑やかに繰り出すところです。息がぴったり合って何やら楽し気に見えませんか？

京七宝協同組合設立
15周年記念

京七宝協同組合設立参加に私は消極的でした、110年前から泥七宝作り工房として歴史はあるがほぼ輸出向きの花瓶が中心だった。1ドル365円の時代はよく売れた。アメリカへ花瓶として輸出するのであるがその用途はランプベース、電気スタンドの部品となっていました。



それは日本の七宝花瓶をわざわざハンマーで傷を付けたりしてアンティーク調の花瓶を使ってランプが出来ているというのがアメリカでは好まれたようでした。しかしドルショックで1ドル200円を境に泥七宝製造は縮小し青銅花瓶やブロンズ像の仕事が中心となりその後文化財の修復では寺院関係などの仕事が増えた。更に銅鐸など考古学関係の仕事に取り組むようになってNHKなどテレビにも出演等で七宝の事はすっかり関心が無くなっていた。そんな時に京七宝協同組合の設立の話を聞いた。設立メンバーの野村さんは金属工芸研究会などでいつも一緒に活動している仲間達であり、お世話になっている人たちの呼びかけなので新たな七宝分野の創造的な作品作りが出来、創造的泥七宝技術を伝承出来ることを息子や次世代に伝えたいと考え、組合設立に参加することに致しました。

今後の目標として鋳金による自由な形をベースに泥七宝で彩色した作品を作りたいと思っています。今後とも親しくお付き合いの程お願い申し上げ、共に新たな京七宝を世界に広めたいと希望いたします。



泥七宝鳳凰



私が七宝焼と出会ったのは昭和四十年頃だったと記憶しています。

昔、昔の頃でうす暗い部屋で友と二人、数少ない材料で電器炉から焼きあがった物体に不思議を感じながら、妙にこの物体が気になり魅力を感じた。

これが私と七宝の出会いでした。

あれから五〇数年、今でも七宝焼とは近ず離れず付き合っています。

こんなに七宝焼と長く付き合って来たのに得意とする作品はなく、産業七宝（売れるもの）の製造ばかりを見つめていたのでまったくの自己流でここまで来たような気がします。

協会の一員に仲間入りさせていただき、作品の展示やら講習会はとても勉強になりました。

これからも伝統と産業を背負って新たな創作意欲の高揚と技術の向上で“ものづくり”をたのしみながら、

微力ではありますが協会の一員として七宝と歩んでいきます。



ザ・歌舞伎（ネックレス）



茶托

七宝焼きとの出会いは、知り合いの喫茶店のマスターの勧めでした。当時大学を出たばかりで、子どもの頃から好きな絵を描くことや彫金を学びたいことなど、この先のやりたいことを模索していました。そんな時、骨董品にも詳しいマスターから「七宝焼って知ってる？七宝焼きやったら絵も描けるし彫金もできるんちゃう？」と言われ、初めてちゃんと七宝焼きを知ったのでした。

何かにピンときた私は、インターネットで七宝焼きについて調べ始めました。キラキラとした艶やかさは金属とガラスが持つ特有の美しさがあり、私はすぐに魅了されました。

一刻も早く七宝焼きを体験したい！と思い、京都で七宝焼きを体験できるお店を調べてヒロミアートさんに辿り着きました。



初めて制作した虹色のブローチ

そこで初めて制作した有線七宝の虹色のブローチはまだ大切に持っています。

そんな私と七宝焼きの出会いから10年が経とうとしています。

まだ経験も浅い私が京七宝協同組合に加入させて頂けたことはとても幸せなことでした。

先輩方の作品を間近で拝見できたり、七宝技術が歩んだ歴史の奥深さを学べたり、素晴らしい機会をたくさん与えていただきました。

まだ私には良く分からぬことが多い七宝焼きの世界ですが、今も目の前に広がる美しい七宝焼きの世界にどんどん吸い込まれていっているような気がします。これからもずっと身体が動く限り七宝作品とともに自分自身も成長していけたらと思います。



有線七宝「ITO JAKUCHU」バングル



『この美しい焼き物はなんだろう?』
七宝との出会いは、まるでカミナリが落ちた様な胸の高鳴りと共にやってきました。
すぐに京都の七宝の会社へ行き学び始めました。この七宝の会社が関西では珍しい卸製造メーカーで、昭和39年創業(有)美装でした。
奇跡的に入社することが出来、七宝の体験教室の講師・ベネチアンガラスのインストラクター。また、材料部門の商品開発・企画。ホームページ担当など、色々な仕事に従事させて頂く機会に恵まれました。美装の集大成である「カッティングクロイゾンヌ」は、ダイヤモンドのようで息を呑む美しさでした。ここで七宝の特性、技法、歴史など多くを学ばせて頂きました。15年前、(有)美装(現・解散)で勤務していた時、社長と



京七宝腕時計 NarsaOI『鶴の恩返し』



Laputa Jewelry

ヒロミアートさんと七宝を牽引する5社で京七宝協同組合が立ち上げられました。今でも覚えています。あれから15年。簡単に過ぎた年月ではなく多くの乗り越えた創立15周年だと感じます。心から祝福の言葉と感謝の意を述べたい想いです。わたしはその後、結婚・子育て離婚を経験し苦しい時期もありましたが、七宝をもっと魅力的に見せ広めたい。その想いから色々なデザインが湧き上がり、七宝を創ることで元気を取り戻しました。七宝は私を救ってくれた恩人です。
今、京七宝協同組合に会員として在籍させて頂け身が引き締まる思いです。
現在、私はお客様の心の輝きをジュエリーにする。セルフブランディングジュエリーの制作や腕時計制作を手掛けています。無限の可能性のある七宝の特性を利用して、宝石に勝る価値あるものを創りたい。そんな想いで試行錯誤しています。
最近作ったものでは、大切な旦那様の遺骨を中に納めるプラチナ七宝メモリアルジュエリーペンダントです。重みのあるお仕事で緊張の連続でした。完成してお客様が喜んでくださった時は感動的でした。これからも、水の流れるように淀まないよう進んで参ります。

京七宝協同組合設立<2007年2月2日>15周年おめでとうございます。

記念誌発行にともなう題材をいただきましたので提出させていただきます。
私事ですが、(七宝焼き)という文字を知ってから約50年。学生時代に今は存在しないB社で釉薬計量のバイトをし、その折に七宝焼きにめぐりあいました。陶芸品やガラス製品とは違い、繊細で色数も多く、大変きらびやかな作品を感じました。その後まさか、自分の決まっていた仕事先を変更してこのB社に勤めることになるとは、不思議な縁でした。この会社では七宝焼きの製品制作、金具材料の製造(外注職人さん)への手配等々、仕入先との折衝、営業等(七宝焼きの製品は各地の観光地のホテルの売店で沢山並べていただいており、搬入、棚卸に毎月行きました)。技術的な講習会としては(小、中、高、学校の先生方への七宝焼き講習会にも取り組みました)。色々なことを学びました、感謝です。
京都市内では今、存在しませんが観光地での七宝製品販売店Y社(透かし彫り銀板の加工、製品の仕上りは見事なもの)。京都、粟田口では昭和の京七宝誕生の会社でもあるI社(店内には優れた職人さんが職人技を披露される場があり、多くの国内、海外の方々が魅了されました)。B社の製品は無線七宝から取り組んでおり有線七宝への制作は他社よりも後でした。伝統の技の文字のなかには、各社の秘めたるものがありY社I社B社のオーナ様の交流もなかなか難しい時代だったように感じました。その後1980年代から社員交流も始まったと思います。七宝の手足となる金具材料の加工、釉薬の販売、(拡販)を行なうため製品部門、材料部門を設け、I社が使用して頂ける仕上りの良い金具の提供にも取り組みました。Y社の加工の透かし彫り銀板を仕入れて七宝焼教室の先生方に販売もいたしました、全て京都ブランドです。但し、続けること、伝承、継承する事の難しさ痛感します。長くなりましたが本題に!

京七宝協同組合への思い

2000年に独立して個人的に七宝に取り組むようになり、その何年か後にプレス加工の職人さんが声をかけてくださり組合に入会させていただきました。会員の方々はほとんど顔見知りの方で七宝焼きの製品制作に取り組む人たちばかりです。2009年には<京七宝>の文字も商標登録され京七宝協同組合の会員が京七宝の文字を使用可となり、古くから京都で七宝焼きに取り組まれていた方々(七宝教室の先生、七宝作家)との間に壁ができたように感じました、立場上、全国の(七宝教室の先生、七宝作家)の方々との交流もあり話を聞かれることもありましたが、私も会員外なので答えられませんでした。京七宝組合の立場として、七宝に取り組む方々が如何に平等に製品販売、材料販売が成り立つよう、新規会員の募集に勤めていただけたら良いのにな!と釉薬の小売をしているものとして思います。

2022年(令和四年)今は会員の一人としては言えることは組合の主旨、方向性、取り組み内容を明確化して言葉で伝える、SNSの時代だからこそ配信力は強いですが、狭い京都、生の声を伝えて会話することが大事かなと思います。

入会後に得たもの

過去には七宝焼きも中学校のクラブ、サークルで

も大学の研究、サークル、会社での福利厚生でも取り組んでいたのですが、今は40歳前半の先生方は七宝焼は知らない方がほとんどです。七宝焼の普及の為に講習会もしていますが一人では活動の場が狭すぎます。8月に七宝組合からワークショップの話があり、これだと思いました。少しでも七宝焼を知ってもらうためには、やはり以前にも取り組んでいた講習会や体験で興味を持っていただくこと、(周期だなあ)、と感じました。このことにより、製品、材料の販売、流通につながると思い取り組みました。夏、冬の子供伝統工芸体験は七宝焼は一番人気でした。地道な努力を惜しまず多くの人たちに七宝焼を伝えて興味を持って頂くことが、他の組合員の方々の製品販売にもつながることだと思います、今の私の立場はその様な気がします。

今後の組合への期待

七宝焼の歴史は正しく記された資料はなく不透明です。但し昭和、平成、令和の今日までの流れは明確です。京七宝協同組合設立後の歴史は作るものだと思います。各組合員の方々の技術には秘めたるものがありオープンにできないことと思います。但し伝承の為に伝えていく資料を(歴史、作成方法、技法、釉薬の種類等)、組合員の方々の集結力で作成することが重要なことだと思います。

入会までの軌跡と京七宝協同組合

母が七宝作家であり、幼少時代から身边に七宝焼の存在する環境で育ちましたが、美大卒業後は他の様々な“つくる”現場に携わり経験を積んだ後、改めて七宝焼の伝統継承を決断し独立。しかし、本格的に活動を始めた当初から京都で七宝焼に従事する方々との交流がないまま、数年間、個人で制作活動に没頭していました。そんな中、「京七宝協同組合」について知ったのは、とある伝統産業の展示会で紹介された京七宝の実演でした。その時ご担当されていた職人さんから色々とお話を伺う中で、はじめて組合の活動について知ることとなりました。

展示作品が、それまで自分の知っていた七宝焼とは異なる印象で新鮮に目に飛び込んできたことを記憶します。その日の夜、組合の野村理事長から突然お電話を頂きました。大変光栄で恐縮しましたが、直接お話を聞く中で、ちょうど今、組合員を募集していますとお説明を頂いたことがきっかけとなり、2019年組合に入会させて頂く事になりました。

組合では独自の新しい京七宝のスタイルで精力的に事業展開されている事業者さんや作家さん達が集まり活動を続けておられ、それらの活動は同じ京都で七宝焼を続けている自分にとっても学びある興味深い場所でした。

入会後の活動では、年に一度の夏の研修会や展示会、他にも共同制作を行うなど組合員同士の交流もある中、時には京都市や京都府、伝統工芸協議会等のイベントに参加させて頂く等ご支援

を頂きながら年間を通じ充実した活動を行わせて頂いております。

京都における七宝焼の歴史自体は古く、室町時代には七宝器の使用されていた記録が残り、桃山時代には京都で作られた七宝焼が京都市内の寺院やお屋敷に今なお現存しています。

この古い歴史の中で受け継がれてきた伝統の尊さ、また明治以降も京都の伝統産業として大切に営まれてきた京七宝。現在ではその尊い伝統を引き受けしていく場所として「京七宝協同組合」が存在しているように思います。

組合が結成されて今年で15周年。先輩方から自分が入会する以前の組合の歩みについて色々とお話を聞きして参りましたが、これまでの組合の絶え間ない努力が実を結び、今日を迎えると思います。今後更に、「京七宝協同組合」が伝統とこれからの新しい京七宝の魅力を伝える「京七宝発信のプラットホーム」としての役割を担い、組合員それぞれの事業と共に発展し、末長く続いていることを願っております。



この度は京七宝協同組合設立15周年おめでとうございます。

入会してまだ日が浅い私ですが、以前から研修会などに参加する機会をいただき、毎回違う内容を企画してくださる実技講習では新しい知識や技法を学び、またその場が組合員の皆様と交流を持てる機会もあり大変貴重な時間を過ごすことが出来ました。

組合の展覧会では、同じテーマでそれぞれが作品制作に取り組み、工房の特徴や制作者の個性が表れた作品はとても興味深いもので、改めて七宝というのは無限の可能性を秘めた工芸であると感じました。

私は七宝を始めて26年になりますが、初めて七宝を制作したのは小学生の頃に参加した七宝体



盃：銀有線七宝花唐草紋盃

験でした。初めて触った釉薬のジャリジャリした感触や、焼き上がった色の変化を見て驚いた気持ちは今も記憶に残っており、この時に経験したことが後に七宝に携わることになるきっかけであったと思います。

そして現在は「京七宝ヒロミ・アート東山店」に勤務し、商品の製作や販売の業務、そして七宝体験と教室の担当を行っています。

小さな頃に教わった七宝を自分自身が伝える立場となった今、時に難しさもありますが、作る楽しさをお客様と共有出来ることは嬉しく、全てが大変有意義な時間と感じております。

その機会を通じて一人でも多くの人に京七宝の魅力を伝えられるよう、日々努めて参りたいと思います。そして微力ではございますが、それが京七宝の発展へと繋がれば幸いです。

現在はコロナ禍の影響でお客様が少なくなり、なかなか難しい状況が続いています。一日でも早く普通の日常に戻り、また以前のように賑わうことを見より願っております。

最後になりましたが、組合の一員として更なる七宝技術の向上に励んで参りますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。



プローチ：ブルドッグ



この度は京七宝協同組合15周年、誠におめでとうございます。組合に参加をさせていただいてからようやく1年となる身分であります、15年間様々なステージで活動を続けて来られた組合員の皆様には、色とりどりの軌跡と共に多くのご苦労があったことと存じます。大学生活の中で七宝と出会い、七宝の魅力に気付き、短い授業時間を作り出すように作品作りに取り組み、卒業後はこう

してご縁をいただきまして、京都の地で七宝を作り続けることができております。銀線により仕切られた空間を、釉薬で繋いでいくように作り上げる工程が好きで、組合に参加をさせていただいてからも変わらず有線七宝によるものづくりを中心に据えて制作を行っております。

2021年の12月には、組合展の新たな試みである京七宝マルシェも開催され、企画事務局の一員としても参加をさせていただきました。残念ながら、京七宝マルシェの会期中に会場の様子をうかがうことは出来なかったのですが、2回目、3回目と続していくこれからに向けて、前進する気持ちを持ち続けたいと思います。

組合員の皆様の活躍から七宝の魅力に気付いてくださる方が増え、これからの七宝界がより盛り上がりていきますように願いを込めて、今後とも楽しく七宝に向き合うことを大切に精進してまいります。

七宝焼は歴史の中で幾度となく不死鳥のようによみがえり、不連続な歴史を持つ、前衛的な工芸と思っています。組合主催の研修や交流を通して、新しい知見を学ばせていただきつつ、その時代時代において突き抜けた作品からも学びを得、後世から思い起こされるような作品を作れたらいいな、と思っています。



銀七宝ペンダント



透胎七宝ペンダント



盃：正倉院十二稜鏡紋写盃



ブローチ：ノスタルジア

「京七宝協同組合」設立から15年の歩み

2007年 1月6日 創立総会 於:京都市健康保険組合保養所“きよみず”
2月2日 京七宝協同組合設立(京都府設立認可2007年1月18日 9金第14号)
4月12日～5月29日 京七宝展「若葉もゆ」京の伝統産業・元気応援事業(京都市) 於:ギャラリー圓夢
7月14日 総会 於:有限会社ヒロミ・アート
7月6日～7月10日 「七宝で創る京の秋錦」京の伝統産業・元気応援事業(京都市) 於:東京京都館
8月23日 「京都府中小企業団体中央会」と「京都伝統工芸協議会」に加盟
8月29日 大阪造幣局見学

2008年 3月19日より3月23日まで 京七宝協同組合として福岡の全国陶磁器フェアに出展
5月9日 「京七宝」として地域商標の登録を出願(出願日)
7月19日 総会 於:有限会社ヒロミ・アート
10月15日 自治110周年表彰状 京都市長 門川大作様より
10月16日～11月18日 京七宝協同組合展 於:ギャラリー圓夢
12月19日 岩田広己氏講習会(厚手アルミ箔による銀滴彩飾花器) 於:有限会社 美装

2009年 6月19日 地域商標の(登録日)商標登録番号:第5240488号
7月11日 総会 於:有限会社ヒロミ・アート
8月27日より10月20日 「秋錦 京七宝協同組合展」 於:ギャラリー圓夢

2010年 7月10日 総会 於:有限会社ヒロミ・アート
9月2日より11月9日 展示即売会 於:ギャラリー圓夢
11月27日 加藤勝己氏講習会(尾張七宝の体験) 於:有限会社ヒロミ・アート

2011年 7月9日 総会 於:有限会社ヒロミ・アート
9月8日～10月18日 展示即売会 於:ギャラリー圓夢
11月19日 小林正雄氏講習会(彫金技法について) 於:小林彫金工芸工房
12月17日 浅野美芳氏講習会(彫金技法について) 於:有限会社ヒロミ・アート

2012年 3月29日～5月8日 展示即売会 於:ギャラリー圓夢
7月14日 総会 於:有限会社ヒロミ・アート
12月15日 山名祥友・弘子氏講習会(銀製指輪制作) 於:有限会社ヒロミ・アート

2013年 2月19日 京もの指定工芸品「京七宝」認定(京都府知事5染第22号)



2013年 6月6日より7月9日
7月20日

展示即売会 於:ギャラリー圓夢
総会 於:有限会社ヒロミ・アート

2014年 1月24日
1月25日
7月19日
8月1日～8月31日
11月15日
12月4日～12月8日

「京七宝」を京都市の伝統産業に追加(産商伝第223号)
岩田広己氏講習会(銀製透胎七宝ペンダントの制作) 於:有限会社ヒロミ・アート
総会 於:有限会社ヒロミ・アート
実演と展示即売会 於:東京京都館(伝統と文化のものづくり産業支援事業)
小泉裕司氏講習会(鎔金による皿とアクセサリー制作)
於:青銅器工房「和銅寛」
大陶磁器スタジアム2014 in コンベックス岡山 出展



2015年 2月13日
2月13日～2月15日
4月30日より6月30日
7月18日
10月18日
10月13日～11月23日

藤田真里子氏講習会 於:ヒロミ・アート東山店
京都伝統工芸協議会 展示販売会 於:ハイアットリージェンシー
展示即売会[琳派400年記念京七宝協同組合展] 於:ギャラリー圓夢
総会 於:有限会社ヒロミ・アート
植物園催事
ハイアットリージェンシー催事(京都伝統工芸協議会主催)

2016年 2月18日～2月23日
3月5日
4月2日～5月12日
4月28日～6月28日
7月16日
11月8日～11月13日

伝統的工芸品 WAZA2016 池袋東武催事
岩田広己氏講習会(七宝ペンダントの制作) 於:有限会社ヒロミ・アート
京都茶寮催事
展示販売会 於:ギャラリー圓夢
総会 於:有限会社ヒロミ・アート
ハイアットリージェンシー催事
(京都伝統工芸協議会主催)

2017年 2月16日～2月21日
2月24日～3月1日

WAZA2017 池袋東武催事
京七宝協同組合設立10周年記念展
於:高台寺・北書院



2017年	4月27日～6月27日 7月15日	展示即売会(～翌年度) 於：ギャラリー圓夢 総会 於：有限会社ヒロミ・アート
2018年	2月9日～2月13日 2月24日 4月26日～6月26日 7月21日 8月26日 10月18日～10月22日 11～12月	ハイアットリージェンシー催事(京都伝統工芸協議会主催) 岩田広己氏講習会(打ち込み象嵌による七宝胎の制作) 展示即売会 於：ギャラリー圓夢 総会 於：有限会社ヒロミ・アート 加藤勝己氏講習会(皿有線七宝の制作研修—研磨を中心に) 於：有限会社ヒロミ・アート みやこの粋 京の技展 ハイアットリージェンシー催事 「新文化産業」強化支援事業への参画 於：ヒロミ・アート東山店、七彩工房(JR宇治駅前)、 PEKI!RARIGON(紫竹桃ノ本町)
2019年	2月26日 3月10日 7月13日 8月24日 10月2日～10月6日 11月22日～11月27日	地域団体商標「京七宝」商標権存続期間更新登録申請 商標権存続期間更新登録申請電子化料金納付 総会 於：有限会社ヒロミ・アート 小泉裕司氏 象嵌七宝(泥七宝)技術研修会 於：青銅器工房「和銅寛」 みやこの粋京の技展 ハイアットリージェンシー催事 実演と作品展示会(京七宝六角時計展) 於：圓徳院
2020年	1月11日 7月18日 8月29日 12月5日～12月13日	臨時総会「京七宝」伝統工芸品の国への指定の申し出を決議 於：「みづき」(京都市右京区) 総会 於：有限会社ヒロミ・アート「書面審査」 中山佐智子氏講習会(箔彩技法一平脱) 於：有限会社ヒロミ・アート(東山店) 「京七宝協同組合展 TRY」展示販売会 於：京都伝統産業ミュージアム MOCADギャラリー
2021年	7月17日 7月23日 8月22日 11月25日 12月8日～12月12日	総会 於：有限会社ヒロミ・アート(東山店) 感謝状 東京2020大会記念品プロジェクト実行委員会委員長 村松 昭典様より 黒田智子氏講習会 (照明器具を制作ーステンドグラスと京七宝を使っておやすみライトの制作) 於：(株)黒田ガラスセンターステンドグラス教室 優良組合 表彰状 京都府知事西脇隆俊様より 「京七宝マルシェ」展示販売会 於：京都伝統産業ミュージアム MOCADギャラリー
2022年	2月17日～2月23日 3月30日	WAZA2022池袋東武催事 「京七宝の歩み」京七宝協同組合15周年記念誌発刊

歴代役員に関する事項

第1～4期 役員の氏名及び職制上の地位及び担当

役名	氏名	法人名及び員外別
代表理事（理事長）	2007年2月2日就任 藤岡 伸次郎 (2010年9月7日辞任)	有限会社 美装 代表取締役
副理事長	野村 ひろみ (2010年9月11日理事長就任)	有限会社 ヒロミ・アート 代表取締役
理事	赤川 吉洋	有限会社 賛工芸 代表取締役
理事	津田 保	有限会社 七彩工房 取締役
監事	山本 慶子	個人

第5～6期 役員の氏名及び職制上の地位及び担当

役名	氏名	法人名及び員外別
代表理事（理事長）	野村 ひろみ	有限会社 ヒロミ・アート 代表取締役
副理事長	津田 保	有限会社 七彩工房 代表取締役
理事	野村 章	有限会社 ヒロミ・アート 取締役
理事	津田 佳美	有限会社 七彩工房
監事	山本 慶子	有限会社 山本美術 監査役

第7～10期 役員の氏名及び職制上の地位及び担当

役名	氏名	法人名及び員外別
代表理事（理事長）	野村 ひろみ	有限会社 ヒロミ・アート 代表取締役
副理事長	津田 保	有限会社 七彩工房 代表取締役
理事	野村 章	有限会社 ヒロミ・アート 取締役
理事	津田 佳美	有限会社 七彩工房 取締役
理事	山本 慶子	有限会社 山本美術 (員外)
監事	野間 富美子	個人 (員外)

第11期～現在 役員の氏名及び職制上の地位及び担当

役名	氏名	法人名及び員外別
代表理事（理事長）	野村 ひろみ	有限会社 ヒロミ・アート 代表取締役
副理事長	津田 佳美	有限会社 七彩工房 取締役
理事	野村 章	有限会社 ヒロミ・アート 取締役
理事	津田 保	有限会社 七彩工房 代表取締役
理事	山本 慶子	有限会社 山本美術 (員外)
監事	野間 富美子	個人 (員外)

昭和の京七宝協同組合について

野村 章

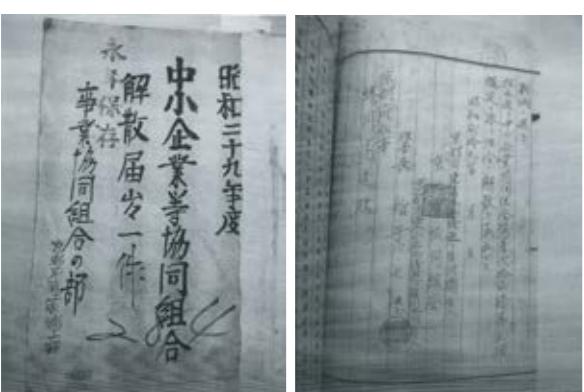
京都府立京都学・歴彩館で保管されている京都府の古い記録によれば「京七宝協同組合」は昭和25年12月4日に京都市東山区三条通白川橋西入今小路町86番地に設立されたことがしるされているので、ここでその概要を以下紹介する。地区は京都市一円であった。

組合員の資格は①「七宝製造に従事する事業者であること（協力加工業者を含む）。」②「組合の地区内に事業場を有すること。」と記載されていた。事業計画の概要：組合員の相互扶助の精神に基づき、組合員のために必要な共同事業を行い、組合員の自主的な経済活動を促進すべく、先づ外客向け最適格品七宝の最近に於ける需要に対して、生産のそれに副えざるを遺憾とし、従来より制作せる煙草函、宝石函・・・との記載もある。

事業としては8項目が記載されている。①共同生産、加工、販売、購買、保管、運送、検査
②事業資金の貸与（手形割引を含む）借入
③教育及び情報の提供 ④団体協約の締結 ⑤福利厚生施設 ⑥商品券の発行 ⑦倉荷証券の発行
⑧経営及び技術の改善向上

組合員数は4名。

出資は総口数150口で、1口の金額1,000円、

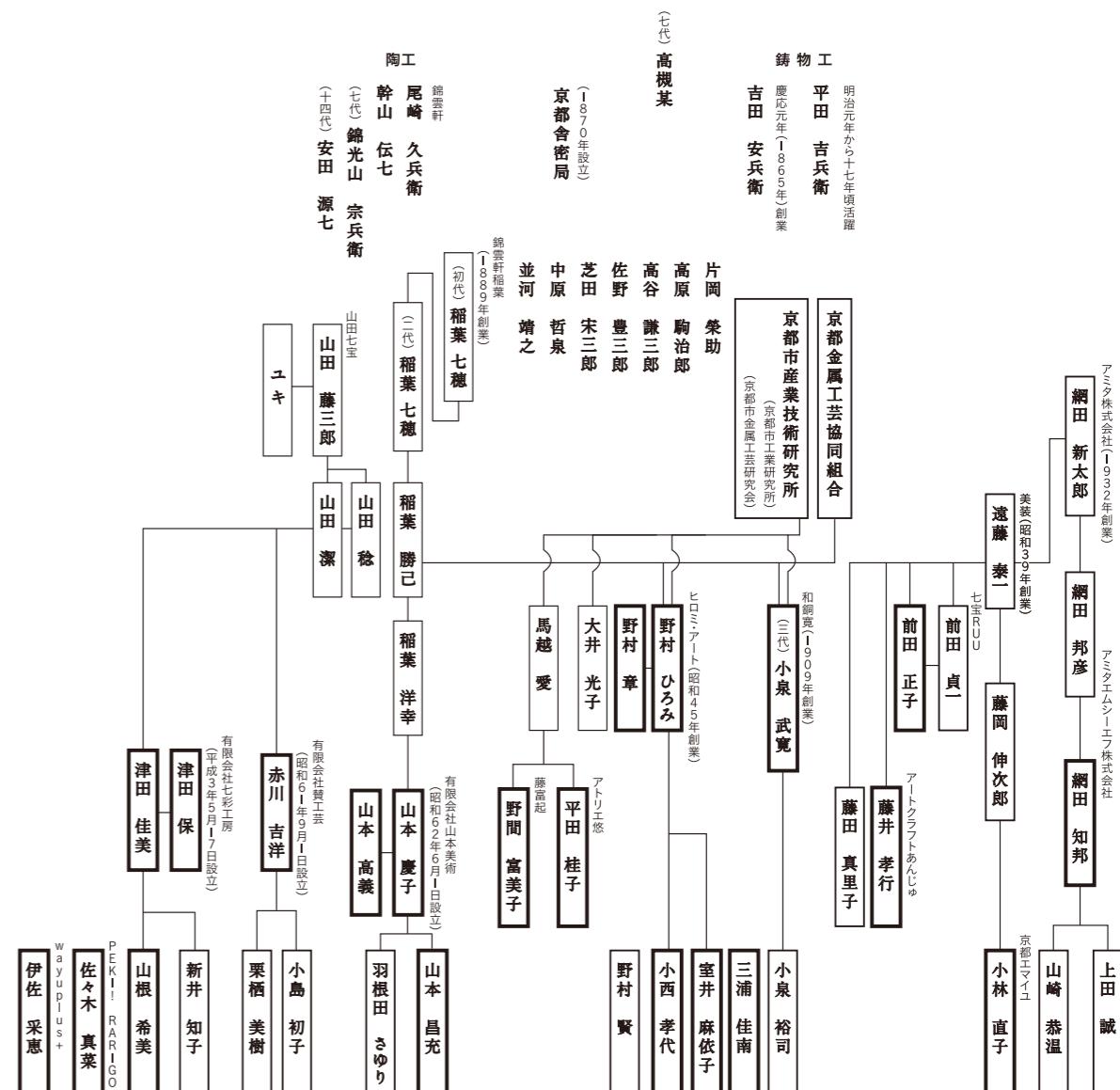


払い込み出資額150,000円であった。稲葉七穂が理事長を務め3年超活動したがその後昭和29年4月21日に解散している。

解散理由に「当協同組合も創立以来既に三か年余りとなり、大過なく今日に至りました。創立当時に於いては相当に利用し、組合員の福利厚生に大いなる効果を上げましたが、その後各人も相当の発展を來し、今日にては組合も有名無実のものとなりましたので一先ず解散をなし後日改めて大多数の組合員を以て新に発足することとなりました。この解散は組合員の多数の方々の意見であります。幸いに当組合も組合員諸氏の理解の下に役員諸氏の努力により大過なく今日に及びました事は誠に幸せであります。」とある。

この頃の組合は経済的な支援を目的に設立されており、懇親会での情報交換や手形の割引などの事業が行われていたようであるが、京七宝の職人が連絡出来る組織が存在していたことは特筆にあたいする。さらに解散に際し将来の組合の発足についても触れていることから、「京七宝」の職人が存続していくことを願い一旦解散したことが明記されていることを強調しておきたい。

京七宝協同組合関係図



「京七宝の歩み」京七宝協同組合 15周年記念誌

編 集	I5周年記念誌制作委員会
発行日	2022年3月30日 初版第1刷発行
発行所	京七宝協同組合
制作	京都市西京区嵐山朝月町20-8 (有)ヒロミ・アート内 株式会社アイ・アンド・アイ
印 刷	株式会社グラフィック

本書の収録内容の無断転載、複写、引用等を禁じます。
Copyright © 2022 KYOSHO COOPERATIVE
Printed in Japan

